

巻
183
8

昔話 稻妻表紙巻之五 下冊

江戸 山東京傳編

十九 刀劍の稲妻

その時、麻呂のたぢり小幡の里みつりて山三郎ふその日子細きは
 おきまのり葛城が誠心を告あつふいとほく存じとせめて一度は
 かの地ふれ越あつて御對面あはしとまめけと山三郎のひけりハ
 五條坂ふ葛城のふ名妓ありといひめそのふ同はるその者高田茶
 右赤門の娘岩橋あてあんとあ夢あてもあはさりたかの者の親くの得心を
 某といひあげけの女なりといひども。今花街小あちりわかれの身と
 かりたる女小對面せん武士の名をけりといふ似たり。かれが志の不便なり
 とのいひども。對面ハあつふをいひども。麻呂のひけりといひかたり

そいたづらも葛城の物ざりをまきけ。頃日雲小稲妻の夜裳を着
たる待五人のりく。地小往來するは。そのうち一人のりくを伴左馬門
あて外の深層の三平等四人の者ふらごひは。これのりくを推量の
ごとく。相公をはり出して。つるもあふせん謀計ふまされ。先だちて御
父君夢中お告玉ひい。はまていん。珠更葛城の誠心うごかす所
あけは。一度の地おんに。ありて葛城のものをたのむひ。つるが計
のりくをのり内外より相番をささめ。五人一等お取玉の良計とを
あまま不け。君父の讐の共小天を戴ととせ。眼前の敵をえて
時を失ひ玉のんこと。ゆめくあ。なごご復讐の為花街のりくを
こと。いごう耻玉のりやと。いさめけ。山三郎げあ。さうと。その夜麻
糸を見。あ。のびやうふして。五條坂のりく。神林がり。瓜た。りて葛

城子對面。け。葛城が。あ。ひのり。もあ。山三郎の露を。あ。め
め。詞。終夜只復讐の計を。朝。あ。山三郎毎夜。麻
これより。后葛城が。り。金銀衣服を。山三郎を。の誠
を。び。山三郎。た。ひ。な。女。感。あ。り。葛
城の伴左馬門が。面。又。知。を。つ。れ。のり。山三郎毎夜。麻
糸。の地。は。して。五人の者。取。便。待。深。さ
望。顔。し。袈。衣。を。着。物。の。心。坊。お。扮。て。あ。の。ひ。り
と。を。り。の。も。五人の者。のり。往。来。して。五人一同。来。ること。な
り。その。踏。を。は。け。のり。のり。も。飯。路。を。あ。て。あ。の。り。所。も
さ。ご。う。り。心。せ。る。を。り。り。そ。あ。て。あ。の。り。所。も。不。破。伴
左馬門。重。勝。ハ。浪。の。身。と。のり。密。父。道。た。り。り。扶。助。のり

一点の不足あり。益野蟹花藻屑の三平。土子泥助。大上雁八等。四
 人の者をかくまひおきて。父が大望をこころ時節を待。紀伊の国藤白
 山の奥。小大なり。居宅を造。野伏浪人ともをあむ。召抱て。いふと
 父と共に濱名入道。小味方。父に結構。専なり。あつこと。いふも。名古
 屋山三郎。在。小あり。うち。寝覚。安。い。元来。の。小。草履。おの。遺恨
 あ。い。バ。こそ。め。れ。親。も。誤。り。て。打。た。れ。い。ふ。い。て。い。ふ。い。り。行。ふ。が
 や。と。み。ひ。け。と。ど。も。その。の。い。へ。弗。お。志。と。さ。れ。い。せん。と。べ。る。く。お。過。け。る。が
 頃。日。京。都。小。居。住。ま。る。は。偶。同。出。し。て。か。の。四。人。の。者。を。あ。ま。へ。て。俄。小
 上。京。し。伏。見。の。里。小。寓。居。し。て。人。の。又。知。り。た。う。一。様。の。特。衣。束。し。て。五
 條。坂。小。往。来。し。山。三。郎。を。逢。て。出。し。て。い。ふ。お。お。せ。び。や。と。さ。る。て。け。り。う
 別。の。日。大。上。雁。八。の。地。あ。て。三。本。傘。の。紋。は。け。た。う。侍。小。出。あ。い。誼。話。小
 又。よ。や。と。さ。る。う。い。は。る。ふ。ま。ま。は。し。く。い。ふ。が。僕。麻。花。と。す。の。い。は。山。三。郎。者。國。の
 う。ち。小。居。住。し。果。し。て。我。等。が。計。小。お。ち。て。我。く。を。は。け。け。い。ふ。ふ。小。い。ひ
 ち。つ。の。い。は。は。さ。し。と。せ。て。い。ふ。お。お。い。と。と。商。議。し。て。い。ふ。く。曲。中。小。入。ま。り
 が。彼。等。元。来。好。色。の。輩。なり。左。衛。門。の。若。木。が。い。の。遠。山。の。い。ふ
 阿。曾。比。小。な。り。と。い。ふ。その。餘。の。者。等。も。そ。れ。い。ふ。ふ。ち。じ。と。得。て。の。ち。六
 山。三。郎。を。あ。ん。計。ハ。い。さ。ふ。り。一。向。遊。奥。小。の。い。ひ。を。つ。中。に。誠。是
 愚。ある。ふ。う。ま。ひ。ち。り。切。山。三。郎。の。専。小。い。ら。を。打。げ。便。宜。を。ま。ち。け。り
 小。一。日。麻。花。の。地。より。あ。い。た。じ。く。飯。来。り。て。葛。城。が。書。を。は。し。出。し。け。り
 山。三。郎。の。い。を。い。く。ら。れ。を。読。み。今。夜。伴。左。衛。門。等。五。人。の。者。一。等。小。若。木。が
 り。と。来。り。は。し。同。出。し。ぬ。朝。の。未。明。小。あ。つ。は。し。同。々。い。は。堤。小。あ。つ。は。待
 ら。け。て。討。取。玉。へ。つ。か。し。ど。い。時。を。過。し。玉。ふ。だ。う。ど。と。こ。と。み。ド。う。小

又よやとさるういはるふままはしくいふが僕麻花とすのいは山三郎者國の
 うち小居住し果して我等が計小おちて我くをはけけいふふ小いひ
 ちつのおいははさしとせていふおおいとと商議していふく曲中小入まり
 が彼等元来好色の輩なり左衛門の若木がいふ遠山といふ
 阿曾比小なりといふその餘の者等もそれいふふちじと得てのち六
 山三郎をあん計ハいさふり一向遊奥小のいひをつ中に誠是
 愚あるふうまひちり切山三郎の専小いらを打げ便宜をまちけり
 小一日麻花の地よりあいたじく飯来りて葛城が書をはし出しけり
 山三郎のいをいくらを読み今夜伴左衛門等五人の者一等小若木が
 りと来りはし同出しぬ朝の未明小あつはし同々いは堤小あつは待
 らけて討取玉へつかしどい時を過し玉ふだうどとことみドう小



名古屋山三郎

五



名古屋山三郎
 五條坂の堤交
 富のうちみぢりて
 伴五馬門等五人の
 びろくゑ待父の
 仇とむくのん
 とと

山三郎

去り

名古屋山三郎

名古屋山三郎なつた。父のつらな覚悟せしことよがうと氷たも力を抜
 るませの侍高くとあざむき笑て編笠をぬれとては方よりたつぬも
 山三郎。そであひつる天の夕へつる打たうを觀念せしことゆひて
 抜合サニ太刀三太刀戦けり。山三郎うしろを刀をうけ損下。左に袈
 紗衣斬りけられて地上小撲地たつた。山三郎麻糸をひきとて
 彼奴が面をよくる。とつらふぞ麻糸立より髻をほくしてひたおし
 月かげふまじし。は者ハ土子泥助をゆきり山三郎うなづく間もか
 く。又おまじごとく小打扮たり侍一人のさぶしつらうをのちと来る。山三郎
 びつた立あさう。汝ハ不破伴左衛門るべし。とて山三郎父の仇を報之
 といひつる。は侍も笠をさしとて刀を抜。うしろをひきつて八
 合戦けり。泥糸をひきつてよりわく所を山三郎飛ひつて朋より小陸

離れんと斬りまゝ。臆を以て下知しとて。あつたのそとしく走り。月
 の光を面びて。は者ハ太上雁ハあせゆといふ。やどあうおはじ打扮の
 侍一人まゝ来る。山三郎ちりぐと立む。いふ伴左衛門とて山三郎
 ちりぐを父を赤せ。恨の刃をひきとて斬はく。編笠を
 ぬる。とて刀を抜てよりひきび。丁こあうたつひける。運の尽
 小や堤の端小足をうなげ。うり伏ふたう。所を山三郎一声さび
 て斬ける。たちまち首堤の下小まらびおちぬ。麻糸はひきてとび
 ぐる。かの首をとりあげては首片耳をけし。藻層の三平お
 疑あつた。山三郎その者もまゝ伴左衛門ゆてはまらじかと。ちの
 ちかげふひつる。刀の血をぬぐひ。一息ついでいしぬも。又来る
 侍もあつた。如くの打扮を。身材恰好は度ハ正しく伴左衛門とあひつ。

五條坂の堤丹
抄りて名護屋
山三郎復讐言
五人斬の圖



麻ぞう

山三郎



主子への物

大上つん八

つん三子



前のこころ小名吉めくどい。かの侍ころえたることひりやうの刀の鞘小
 手をかぐる所を山三郎とどうてめをて腰車小斬けるが直ふたのいも
 せど。三十歩あめい。麻花いひの者外なところえてあをとおひ
 ておにころふ。切の者前ふきりれ。者の死骸ふはぬづき。二つふらうて
 ぞたふれける。山三郎が刀の父のめくもの左文字の名作斬人の剣法手
 練の早業めくありもこところいと麻花心小感トけるが。山三郎心せに伴
 左衛門いふくともつ麻花屍とあうためうて。以者のい益野蟹屍と
 いとつ。山三郎のひけり。その者いまはして伴左衛門と名ひふ。そのいも
 又かどあていあうるじ。四人の者どり伴左衛門をたよけて父を
 たる仇人なりといふども。本人をおざらうちの安堵わうがど。つごを
 来べたさうあうあといふらう。やあがうく待といふも人影もあ

古今圖書集成

下



麻呂



山三郎

其二

各古屋卷之五十一

以場をのりしん鳥のりりちあらんこひひて同分ど巴大勢を捧
 を打うつと敵たりんにたる所小麻呂大勢を巴りけて山三郎が
 前ふちうづき相公の大事のめんむれがゆれ等ふゆひまらど。
 見つるゆへに。あつら集ぐよれふとらひひじと大勢ふむひ海
 等うごけつてふもとららつたれば某人質となりてさふさまるじ
 ば見方とてをひくまてとて中やまらじといふあぞ。曲中の者どもやうく
 得心してかきとをひくけぬ山三郎夜のあけをてぬ同分といきだて
 小幡ふむけしけし。初山三郎八年来の宿志とてけ。いささまらして小
 幡の里ふむけしける。以時巴夜のあけをてぬ。さて伴左衛門が首を父
 の位牌小手向をやとるひ。汝の息ふく年月又もに苦勞世こころ
 とのひつ。編笠のうちよと首を取出しとえれば。いふ伴左衛門

ありあつてして葛城が首あはる。その夢現りといひて。只あはるとる
 心をちり。されあの大勢ふとてをぬれて心せいら火急の時あはる。
 心ばらざらじが。あつら残し手首とる。何ふあらんあはるを
 のあつて手くびどりだをばして。一通の昏とみだりて。居
 たるける。いそがしくひくさる。是乃かたおまの文なり。その文ふ
 いそく。妾ことば度不思議ふ殿ふめがうちひ。おん父の仇ある伴左衛門
 等と手引して。うさやさんとうけつひけつ。お前の日伴左衛門妾が
 りとふ来りて。さう。今までのまらざらじが。頃日偶さけつ。汝の和州
 子守町の浪人高間久米右衛門が娘幼名と岩橋といひつる者のは。
 志とさわらや。うしくそれふたが。いふ。平く我別腹の妹あて妾腹
 なり。その妾あつてありて。懐胎のうち。久米右衛門がめとふ嫁。

ちねの方かたあて汝きみを産うつるとし。おぬて父ちち道みち太たの物語ものがたりあてまゝぬ其
 のちへたえておとづれも因よざりしが。はくろぬおを賣うりてい夢ゆめおた
 もあぐざうれば。終おしまあるとい父ちちの耻ちぢ我われ耻ちぢわぬが。父ちちおは妻つまを告つげて金
 子かねを調しらす。そみおあがなひせ。はるのさぶし。そめつと。巴よ小こ昨夜さくや
 そくむくの金子かねと以もつて我われおとあがまひあひらぬ。伴ばん左さ衛ゑ門もんのヤやさ
 々と一所ところのちく我われおおがえあは。別べつ腹はらの兄あにたることら。さひは。まを
 伴ばん左さ衛ゑ門もん密ひそかヤやさうへい。あごろ名な古こ屋や山やま三さん郎らうとい人ひと者ものと。りく汝きみが
 りと通とほひ来るくるし。おぬぬ我われ深ふかき遺い恨えんあぬが。汝きみ手て引ひしておせ
 くれ。とのちの。なり。それを因よて胸むねうさう。兄あにのたの。と。う。は。く
 ば夫おとこを殺ころすと大だい罪ざいあり。おんおつとて兄あにを打うつと。又また大だい罪ざいあり。さ
 因よ士しお縁えんつなづし。い。う。ち。宿しゆく世せの因よ果ぐぞと。我われお一ひとつのかさ。は。

御ご推おし量りやうを。さ。れ。し。こ。も。生なむ。く。人ひとか。れ。お。の。う。へ。と。覚しやく悟ごを。さ。め。め。か
 ぶ。の。ゆ。へ。今いま宵よ伴ばん左さ衛ゑ門もん等らうを打うあへと通とほす。おき。伴ばん左さ衛ゑ門もんど
 かの四人よににんの者ものと共ともおつとんとヤやと。用もちあつとて。別べつ坐ざ敷しきおと。ど
 ちね家うち内うちの者ものあ。伴ばん左さ衛ゑ門もんどの深ふかく。醉あひたるは。し。を。告つげて。妻つま。因よ座ざ
 まで。駕か籠かごと。お。入いさせ。妻つま伴ばん左さ衛ゑ門もんどの姿すがたお。扮はなち。駕か籠かごお。乗のり
 出いへ。おんおの手ておつとて。死あん。為なり。ど。し。の。ど。も。の。ご。と。く。おん手てお。さ
 ん。だ。る。あ。ん。が。伴ばん左さ衛ゑ門もんを打うし。とお。不ふされて。お。み。て。の。恨にくを。さ。じ。玉たま
 何なにと。ぞ。兄あにの。命いのちを。お。ん。た。と。け。さ。れ。し。そ。め。の。今いま生なの。願ねがひ。敵たかの。妹いもうと
 と。因よお。の。ご。後ご悔く。玉たまの。が。せ。め。て。来き世せの。夫おとこ婦めかけと。お。不ふされて。さ。り。く。一
 遍ひらの。御ご回まわれ。が。ひ。を。さ。る。を。し。伴ばん左さ衛ゑ門もんどの已し小こ妻つまが。おの代しろを。は。く
 の。ひ。た。れ。が。妻つま死しと。とも。あ。は。じ。道みち順じゆんの。損とり。と。ど。おん手てお。つ。け

夫はほけてつるづは先年某が母病ふなるみ一時御親父三郎
 左衛門どの某代の金子をめぐりて母の命を救ふべきに洪恩心
 銘トせめて露をまらもその報せんものとあひひりひちり三郎左衛
 門どの間打ふあひ玉ひ。和殿もゆへあひむと固てあひあも打過
 しが。それある様二郎がつかまふよりては所ふかきと住らばしうけ
 玉のり。對面して某がその旨と告ぐやと忍出立あてまうて来る
 が途中あて人のあつとさけげ。和殿五條坂の堤あて古傍輩四人の者
 をお人たぐへて葛城とやんり阿曾比を手おつけられあはし。
 今腹まふんとせしと一の察する所人たぐひの誤をさそぢてのこと
 おりん若さるあはバ大ある心得たがひとあふあり。そのあふふとあ
 べ。おとそ君父の仇とむくりんむらりのいく度も耻と忍び命あはん

あつたといふ千里と走りも。たぐひせして仇をむくむが孝道の
 ありあり。今自殺せんかたの疎忽のゆゑとあふむとやといふ山一
 理ふふし面目なれ体ありとて嘉門あつていひける。桂之助どの
 我為小主とあはる。そのいそれの一席あつてがじ。そのあふひてあ
 前どの。先年大和の国岩倉谷あてあ首あてむんとしつるを某忍
 姿小打扮てあつとあひらと。我家あつてあ火術の具とぬて太刀取とあ
 殺し。かく方と奪取。今己小金剛山のあてと家小母りりとも悪あ
 おつとあり。桂之助どの同居しあは佐々良三八郎が忠義あつて月
 若ぶのも悪あ。御夫婦御親子再会の時を得あひぬ。くりた
 こと。夏の様二郎とあつたあは后あつて閉あ。あが一分の心と安
 只は人の復讐の夏のと小心とあつてあひし。某勝基公ふことえ

天のたふのありとよむらして十余合戦はつが。伴左馬門運余々
 たる時やあふん簀の子小足をふらぬきてよめ、所を山三郎や
 足を飛せて合破と踢たふ。乗つらして刀をこころに、首を那と
 びと斬たるいそちよくぞつえたりける。ゆる折し由猿二郎廓の
 変をよゆて恙なく床をともあひて立ちつり、ば体をふて故人
 と小天を拜し地を拜して、まびあるを泣けつらげふたふゆり
 ののののり

(三) 積善の餘慶

初も大和国佐木木の館小の家督さむめの支ふつと。官領由理之助勝基
 公の名代として梅津嘉門景春今日着駕のよし。されだちて沙汰ありし
 けし、判官負国、ぶら下知して廣坐敷を掃除させ、礼服を着

て相待けりふとあり、来駕とてささえし、ゆるゆる玄衣小出て相むら
 梅津嘉門金紋紗の通服、白精好の長袴を曳、海老鞆巻をひ
 中殿の扇を把威儀堂とじて入来り、安内はさして廣坐敷ふらち
 とわり、設の席ふ居るなりけし、判官恭しく礼をおこさひ、長路の
 所御苦勞のいそりふと相のづれ、梅津景春一回の挨拶あり。此度
 官領の名代として某まつてにたる、別儀ふらむと先だちて次男
 月若丸家督の願を出さしはらふ。其儀ふはれおん疑のまぢあつて
 某ふゆにむらひ、乳明せよとの厳命ありし。先内室、珠手の方、花形丸執
 権不破道友をこれへよび出されし、といふゆぞ負国、こころいそかく
 とのひはせせければ、わいとち、珠手の方、礼服をつけ、花形丸、ゆるも小
 出来り。たるゆふ下りて、礼をさし、不破道友も、礼服をて、椽のふ平伏

せぬ。海津景春も負国おのこのひけり。先だちて子息桂之助きすけのすけ在京の
 刺放さしはな仗无慙むじゆんの不行跡ふじゆんおん館くわん義政公よしまさのこうのおん同どう小達せうたつ。官領くわんりやう濱名はまな道
 を以て内命うちのみことあり。已ま勘当くわんたうの才さいとあるし。今いまおのりてふく先非せんひ坂
 悔くひおん館くわん小對せうたい一奉いつほう。一切いっけつをたてたるふより勘当くわんたうをぬけ家いへをわづ
 けておん才さいの隠居いんきよあり。その内命うちのみことあり。桂之助きすけのすけ勘当くわんたう許ゆる免めんのえ
 へいそふの前月まへつき若わも共とも小申こまうしてよびむえし。と相あひのぶる負国おのこ
 の才さいも答こたへもせざる。道太みちたのうと出いおそれおろくハハもいてふの前月まへつき
 若わの現在いま母ははの珠手たまてを呪咀のろし。なる罪人つみびとおし。たへ桂之助きすけのすけハハも
 あるとも。かの母子ぼし兩人ふたりをえおしあり。御政道ごせいだうたちがつくハハ人ひと珠
 更さらつねら兩人ふたりわへ志こころおし。ゆとひけし。蜘蛛くま手ての方かたいふもさ
 あり。おし。兩人ふたり妻つまと花形丸はながたまるを呪咀のろし。なる妻つまの官領職くわんりやうしやくあり。いふもさ

あり。めさるる。ん負国おのこのえ。まえあけゆくと。わ不笑ふせうてひけり
 景春けいしゆん居いたり。たふあり。て兩人ふたりを。と。や。と。在俗ざいぞくの常言じやうげん。盗人たうじん。猪ぶ
 一ひとのハハ正ただお汝等なんぢら。支さち。ん道太みちた。手て小惡意せうあくいを。ま。め。花形丸はながたまるの代しろ
 若わさんと兩人ふたりを。て。月若つきわを呪咀のろし。そのへ奸計けんけいを。て。ふの前月まへつき
 若わを罪つみおし。負国おのこの命いのちと。つ。月若つきわの首くびを。打うせん。い。前
 を。岩倉谷いわくらや小引出こびきだして。首打くびうんと。せ。と。皆汝等みななんぢら。仕業しごふあり。と。桂
 之助のすけ。故ゆゑ。均ひとの根本こんぽんも。汝等なんぢら。子こ伴ばん。左衛門ざゑもんのひつけ。て。ふ。た。ふ。う。ひ。ひ
 ない。た。し。分説ぶんせつあり。や。と。い。膳ぜんふ。と。道太みちた。し。も。ひ。ま。ま。を。そ。笑
 当時たうじ官領職くわんりやうしやくの軍師ぐんしと。尊敬そんけいせ。と。ま。景春公けいしゆんこうのおん詞ことばとも。お。え
 ぞ。ぞ。い。て。ふ。の前まへ母子ぼし。蜘蛛くま手ての方かたを。呪咀のろし。なる。お。の。自筆じひつの願ねが。け。た。ま
 なる。証拠しやうこあり。と。某等そのら。が。奸計けんけいと。や。と。い。何等なんとうの証拠しやうこあり。や。お。それ

あつらひけたぬつし度ぬとのひけしむ。蜘蛛の手がゆその尾ふつと妻が悪
意あるといふぬ濡衣まゝ更よと。はがやまをて居たりけ。時ふ景
春はとたちて様ささふ出先刺やしはけおさるる繩のさそとそく
ろへ引のせとよむや。けしむ。庭ささふ梅津の従者大勢ひく
背後より。名古屋山三郎。礼服を着し。修験者頼豪院を高千小
手小くしてあげ。床蓑猿二郎。兩人小繩をこらせて庭上おひきこく
た。膳あつれ蜘蛛の手の方強悪の道太もろねをえて仰天し。なげ道く
ぞとあられける。景春のひけるの某もあつての者を捕へ悪人その奸
計をちくつちふ。紅明せし。ば場不於ていそま。び證松ふあふ。山三郎
それと。と命トけぬ。山三郎。立ち。刀の端をりて頼豪院の
一めの繩を。あめお。く。そく。白快。休れ。といふ。頼豪院。面を。あめ

蜘蛛の手の方道太。たの。も。より。月若を呪咀したるより。詐筆の願昏を
以て。その。前の。母子を罪お。お。したる。本末を。こら。う。ふ。白快。けしむ。に。到。官。自
国を。どめて。これを。同。只。あ。れ。と。て。居。り。ける。が。たち。また。怒。気。天。ふ。さ。る。の。お
了。道。太。が。髻。つ。う。う。て。ぬ。ぢ。た。す。我。多。病。あ。る。を。以。て。家。吏。を。汝。ふ。ぢ。ぬ
た。ろ。ふ。思。慮。浅。く。して。汝。等。ふ。あ。ざ。む。れ。た。る。を。し。さ。ふ。肉。將。首。ふ。な。ま
こ。も。あ。る。た。ろ。な。く。む。と。た。と。我。を。が。あ。ざ。む。く。も。い。さ。む。り。青。天。を。あ。ざ。む
な。ま。さ。う。と。そ。て。大。小。を。ど。り。あ。げ。庭。上。お。踢。お。じ。け。し。む。山。三。郎。飛。り。て
お。さ。へ。つ。け。高。千。小。手。あ。ぞ。く。ら。く。ら。く。ける。蜘蛛の手の方。以。体。を。え。て。積。悪。の。罪
の。か。し。め。し。こ。や。あ。ひ。ん。懐。劍。を。抜。け。り。を。や。の。ん。ど。あ。ま。ふ。つ。さ。た。て。う。う
が。し。み。ぞ。伏。たり。ける。こ。つ。か。ふ。年。来。の。隱。悪。ゆ。一。時。ふ。あ。り。る。も。總。是。自。王
天。の。罰。し。あ。の。所。へ。山。豈。お。それ。さ。う。ん。や。時。小。花。形。丸。蜘蛛の手の方。の。死。骸。ふ

梅津嘉門 善悪邪正
を礼明て 忠臣孝子小
賞をよひ 積悪の
根子四討
をこひ



梅津嘉門

松形丸

ふりの方



いづのま

夏国

山三郎



頼豪院

○廿一



いそき

うへで

三八郎心

意を子の^ておどしての^いさあやさぬ不孝の罪^{つひ}。おん^お母^はの^い悪意^いも畢竟^{ひつじやう}其^のと
 世^よおたえんと^おむり^れし^{より}更^{こと}お^とど^が某^のと^{とも}同罪^{どうざい}なり。分説^{ぶんせつ}の^いか^のこ^のお
 母^のが^お自害^{じがい}の^い懐剣^{くわいけん}を^ひろ^ひと^り。已^お不^ふ腹^{ふく}お^つき^なて^んに^なる^を。
 梅津景春^{うめづかげはる}お^しら^め。和殿^{わだん}の^いか^のひ^て実義^{じつぎ}ある^更阿^あお^ひぬ。あ^らう^若者^にお
 武士道^{ぶしだう}を^さて^ささ^るの^いか^しむ^べき^更有^{こと}れ^{ども}。悪意^{あくい}の^お母^おつ^なぬ^が縁^{えん}
 有^あれ^がせん^まご^べぬ^し。自殺^{じそく}を^ごま^り剃髮^{ていぱつ}深衣^{しんい}お^姿を^お母^の苦^が提^{たい}を
 某^の先^{せん}祖^そ梅津豊前^{うめづぶんぜん}左衛門^{ざゑもん}清景^{せいけい}より^傳来^{らい}の^大幢^{ちやう}国師^{こくし}の
 法語^{ほふご}一^{いっ}巻^{まき}あり^し。某^の今^{いま}ハ^官領^{くわんりやう}お^はく^て軍務^{ぐんむ}小^{せう}官^{くわん}る^お有^ある^にお^はり^し。禪^{ぜん}法^{ぽう}を^修
 せん^たら^しぬ^は。の^い法語^{ほふご}を^和殿^{わだん}お^附子^しと^ごべ^けし^は今^{いま}より^禪学^{ぜんがく}と^なが^し、

教外^{きやうがい}別傳^{べつでん}の^い妙^{みやく}を^まい^り。直指^{ちきじ}人心^{じんしん}の^い奥^{おく}を^さご^うて^のの^い妙^{みやく}は^名僧^{めいそう}知^ち識^{しき}と^名
 を^あげ^て今^{いま}の^い汚^お名^なを^まご^つし^よと^のい^ひけ^しぬ^は。花形^{はながた}九^く感^{かん}佩^{はい}し^やしく^自殺^{じそく}
 を^ごま^りて^身誓^{しんせい}弗^ふと^おし^きり^ぬ花形^{はながた}九^く剃^{てい}髮^{ぱつ}し^て法^{ほふ}名^なを^胸月^{げつ}と^いひ^し。
 の^ちく^一休^{きゅう}禪^{ぜん}師^しの^い弟子^{でし}と^なり^て。つ^のお^大悟^{だいつく}有^あ徳^{とく}の^い知^ち識^{しき}と^なり^し。
 西^{せい}て^うと^月の^いひ^ろし^をその^い終^{しゆう}お^因果^{いんがく}が^つひ^のま^ごつ^らる^をり^しり
 の^いか^の歌^{うた}を^詠じて^在お^因果^{いんがく}禪^{ぜん}師^しと^称せ^しと^けり^とう^や。さて^景春^{けいしゆん}痴^ち手^て
 の^かの^い屍^{しかばね}を^とり^のけ^させ^負国^{せいくわく}お^ひけ^らハ^道大^{だうだい}が^悪意^{あくい}の^い源^{げん}ハ^濱名^{はなな}入^{いり}
 道^{だう}お^こひ^つつ^ひ。入^{いり}道^{だう}の^い権^{けん}威^いを^以て^おん^おを^押筆^{おしひつ}一旦^{いつたん}花形^{はながた}の^い在^あと^は。
 つ^のあ^い父^ふ子^しとも^おふ^しし^なひ^て。ち^のい^家を^くら^ひぬ^濱名^{はなな}入^{いり}道^{だう}お^一味^{いちみ}ま^ごま^き
 結^{けつ}構^{こう}あり^し更^{こと}あ^らぬ^け今^{いま}已^お勝^{しやう}基^き公^{こう}と^濱名^{はなな}と^確執^{かくしつ}お^あら^ひぬ^中
 け^めの時^{とき}節^{せつ}あり^ぬ濱^{はなな}名^なお^くじ^{なる}道^{だう}大^{だうだい}け^のま^ごひ^おま^ごし^官領^{くわんりやう}



五條坂神林のあり
 名古屋山三郎が飯茶と
 祝してあそぶ
 の舞妓と
 山三郎
 銀子
 衣服と
 神林夫婦
 舞人が
 不あふ

此一圖

摸擬英
 一蝶所
 畫名古
 屋山三
 繪巻物
 之圖





樂物のりもの小打こうちのり。行列ぎょうぎとせせてつらとけり。さうゆど官領くわんりやうの館あて小おひそ。
 再また又また道友だうゆうを乳明にゅうめいあつと。一味いらいの輩たぐひを尽つくく捕とらへて頼豪院たひごういんと共とも誅戮しゆりやくし。
 又またひ道友だうゆうの殊こと小大罪たゐざいの者ものありぬがおりに刑けいをくらひあふ。さそ名古屋山三
 郎ちやうび并なら小佐さくらと良三りやうさん八郎はちらう夫婦ふうふ娘むすめ麻あさ孫まご猿さる二に郎らう等らまでめきれて。その忠義ちゆうぎ
 孝行きやうぎやう貞節ていせつを御賞ごしやう美みあそ。そゆゆくみそくむくの賞金しやうきんをたぬりて
 けしんけしん皆みな感涙かんなみをおしてつらぬ。さそ判官はんくわん貞国ていこく薙髮ていぱつと桂之助けいすけ小家こけ
 をのぼせ。平郡へいぐんの別館べつくわんふつと住すま名古屋山三なごやしやんさん郎らうを執權しやくけんに父三郎ちちさんらう左
 衛門ざゑもんのそく小道友せうだうゆうがそく禄ろくをくらひてとへけし。昔むかしふ十倍じふばいして富とみる才さいと成なり
 麻あさ孫まご猿さる二に郎らう小禄せうろくをくらひてとへけし。忠義ちゆうぎを賞しやうし。けしんけしんふ二人ふににん面目めんもくと
 施ししてとへけし。又また浮世うきよ又また平へいの百蟹ひやくせの巻物まきものを一ひと見みして画道えだうの奥おく
 妙たぎをさす。師匠しせう戸佐とさ正見せいけんの勤きんえをゆり。さそ戸佐とさ又また平重起へいぢゆうきと

名告なのおり梅津うめづ吉茄門きちかもんの吹拳ふきこぶし小せう義政公ぎせいこうの絵所えどころとちりて妹いも於お龜かめの曾そとて兄あに小
 学まなびて自然しぜんと画道えだうの妙たぎをさす。めたぬ。母ははおつと。絵えと祢ねとてその名な
 高たかくさそとぬ。佐さと良三りやうさん八郎はちらうのちゆう拔群はつぐんの忠臣ちゆうしんありぬ。桂之助けいすけおひり。禄ろくは
 あとんとおひりぬ。今いま八はち桑門そうもんの才さいありぬ。とて禄ろくをうけさぬ。せん
 ととちり。唯ただ数すう百金ひやくきんをあつとへけし。才さい小せう应おうせざる。たぬりのありとて再また
 三さん辞じしけし。とちり。あひてたぬりてけし。その金かねを以もつて長谷部ちやうこくべ雲うん六ろくが
 妹いも八はち重垣ぢゆうがきをおひりぬ。とちり。家いへ小せう養やう食じきおひりぬ。とちり。その誠心まことこころを感かんての
 こと。又またとど。さそ山三やまさん郎らうの葛城かつらぎが志しはあつと。神林かみはやしがり。とちり。金かねあつと。ちり。
 才さいとて追福おひさきは。とちり。一生いっしやう妻つまをめき。とちり。ひけり。はと。三さん八はち郎らうお
 同どうて。のち。あひり。不孝ふかうの才さいあり。とちり。め。がの八重垣ぢゆうがきをおひり。とちり。妻つまと
 ちり。む。わとちり。男子おんこをまき。け。後のちふりぬ。とちり。名古屋なごや小山三こやまさんと稱なづぶ。

昔話箱妻表紙卷之五下冊終 大尾
 訓あるも此神史ふおとてのみとれ吉兆ちりや
 待得てるもどろ。不破名護屋の文字ふ自然不破名護屋と云
 狂言とりふ変成始たるゆゑよりの後編ふ詳ちりし元兎の時以
 は小山三出雲の神子阿国とりふ弄姫成妻として歌弄成躍
 ありこまんとりも

江戸

醒醒齋山東京傳著
 一陽齋歌川豊國繪



書賈 本所松坂町平林庄五郎藏梓

○前川文榮書閣新刻略書目

皇朝 戰略 編

半紙本全八冊

定價金壹圓五十錢

此書ハ天慶の始り平の將門が亂と東國に起せしに始り近く寛永の末島原の賊徒西海を殊滅せられしに
 至る迄前後凡う七百有余年の間名將、勇士、公戰、私闘、豪傑、英雄、奇戰、妙略跡の法則とあるべきを數
 多の史乘より撰み出之武學の用に備へたる者にして實に兵家の龜鑑たるべしと云つべし名將の勝を製
 する術を覺り國家興廢の由る所以を知るべき者は此書に如かず

照陽高見先生著

續皇朝 戰略 編

半紙本全五冊

定價金七拾五錢

此書正編の世に行くる、日月に盛衰を然れ共未近世の戰略を記するに至らば故に先生新編續編の著わ
 り其記する所ハ文化年間魯西亞人の入寇に起り大鹽に亂馬關鹿兒島の砲戰大和及び生野に戰ひ水戸正
 好黨の亂長防の役戊辰の初伏見淀川の一舉上野の戰爭甲信武總野北越奥羽函館の諸役佐賀台
 灣に征討朝鮮江華島の捷み至る迄大小の諸戰を記して洩すことかく陸海軍諸公の英武勳功各鎮台の
 偉烈等詳かゝ記載せり若一回巻を繰り心手の釋るに忍びざらんや四方の君子幸か顧み収く其奇書た
 るを知り玉ふべし

清原重巨先生撰 清原重光先生校
草木性譜 附草木有毒圖說

奉書摺大本全五冊

定價金三圓

該書の山林田野に生ずる草木、花實、葉根と微細に寫真して每畫着色其眞を顯し目前實物と觀るに均しく加之記するは滋益、有毒、氣味、性分を擧げ和漢其名稱出所と詳述したきは百物推理の方今興産家と始先植物試驗藥劑鑒別及び製藥家は於て此書其參考は闕くべからざる要書也

丹陰莊門 熙先生編輯

小本全五冊

定價金七拾五錢

此書之四季及雜部は五卷に分ら上之日月、星、雲、風、雨、霜、雪よ下之江海、山川、森羅萬象、宇宙細大と亦く凡う吟味に屬する作題之勿論晚今祭典、漁船車、電信等其尤も新調に適應する珍奇雅正の作題と附して波とよどかし其體裁たる紙面を兩段に野別去上段に熟字を掲げ下段に韻礎を置き每題和漢名家の絶句と稱する作例を挿み且つ平仄譯假名と叮嚀に註明す是を以て刊行以來詩作楷梯の良書と呼われ江湖は流布するよと既に萬有餘部の巨額に及び重刻する再三編者の榮譽書肆の僥倖深く感謝する所あり伏て冀くは江湖の本書新識の吟容其証言からざるを推し最寄書房に就て御購閱あらんとを企望す

丹陰莊門 熙先生編輯

小本全六冊

定價金壹圓五拾錢

此書正編の四季を主意とし編次す故に他の景物に至りては漏泄の失あらんよと恐る是を因て天文、

地理、人事、器械、飲食、草木、百花、菓品、禾蔬、飛禽、走獸、鱗介昆蟲の十三門を區別其體裁と専ら正編の義例に倣ひ只管は作例と増し下段に後輩先進の五七言句及び聯句を掲げ置たれは吟塲墨圃は勿論畫席雅筵に提携すること便利にきて其功最も多し實に正續兩編連理して無瑕完璧ある良書と云ふべし凡そ詩作に志ある諸彦の清玩とせば其攀援の助を爲すよと少小あらず伏て請ふ世に慢然散布する詩作の諸書と同一視するをく巻と繕て其金玉ある全本と知り玉ふべし

竹涯莊門 熙先生編輯

折本銅鐫全一冊

定價金拾五錢

詩韻含英 增補以呂波韻大成
此書は從來世に流布する以呂波韻より一層字數を増し冊首に時令及び花木、禽獸、鱗介の異名を載せ次に詩韻含英異同辨より平仄韻字若干と摘要し只管に詩作初學士の便益に供す世上に類會數多刊行し就中異編同名有之此書需めらる、諸彦之莊門熙編輯の以呂波韻と稱へ最寄書肆にて御求を乞ふ

阿陽堤 大介編輯

一辭 詩文幼學便覽

横本銅鐫全二冊

定價金卅五錢

此書は四季の景物花鳥風月等の部類に分ら熟字若干と掲げ平仄譯假名と丁寧に註明し實に詩文并用の便益に供すること聊か表題不違珍書あり

明屠赤水著

東溪源謙校

考槃餘事

白紙摺明朝綴紙入小本全四冊

定價金七拾五錢

此書の支那歴世の書畫古法帖等の評論及び金石鼎玉文房の諸品盆栽瓶花香爐茶酒琴服等一切の事物載く洩すことなし且其品物の眞偽精粗と辨論し或之製造試擇と修繕との諸法と參記を實に文房賞鑒家必用の書あり

順堂奚疑先生著

白紙摺明朝綴小本帙入全三冊

定價金四拾五錢

書畫皆宜

書家必用の小冊諸君子常に机上に備置き玉ふて其の辨用舉て謂ふ可からず書題畫題と始と一絶句聯句の云ふも更かり堂亭又と館園の別號數字類に至て諸家の妙語を撰て漏さず記したれば該書と披死く其自在を得ずと云ふことなし苟も書と玩ふの諸彦必携有益の書あり

吳縣顧祿鐵卿撰

日本名居安原寛得衆校

半紙本全五冊

定價金七拾五錢

清嘉錄

唐土の年中行事其國の風俗人情と詳載し民間の景物と精す學問の助とあり詩文を作るに甚だ益あり

宋林洪著 元羅先登著 吳縣顧元慶著

白紙摺明朝綴大本帙入全二冊

定價金五拾五錢

正續文房圖贊

○附十友圖贊

此書の支那歴世の文房諸品筆墨硯紙等より茶器香具の文房又屬せべき器具百般其圖式を摸出す雅文者辭を載せたる珍書にきて文士雅客と更なり賞鑒家にも必用の書あり

近藤守重編輯

半紙本全七冊

定價金壹圓五拾五錢

金銀圖錄

此書の往古より近世まで我國通用の金銀貨幣其正品と摸し品類を區別し着色まで凸凹とも其ま、顯したれの實に其眞物と視るに同く且位格時代年月相庭等と詳記をたると銀行を始め經濟家有志の必關たる書あり

南陔富永叢撰

半紙本全二冊

定價貳拾八錢

茶器名形篇

此書は聚樂密の家祖吉左衛門累世の系譜其造る所の茶碗及水指香爐花器等の圖と舉げ其傳記并價位を附し購藏主の姓名と記して遺憶をかしむ苟も紹易の下流を汲む人は必ず其座右に關可らざる書也

秋山仙朴先生撰

大本全三冊

定價四拾錢

當流基經大全

此書は本因坊策元の直傳と記すもれおし諸家の聞書圍碁石置れ心得より都て秘傳妙術と惜まざりししたれと圍碁と嗜む人は勿論假令初心の人と雖も此書に據るときは碁石定位の法を知り變化勝敗の理とさし易く所謂定石しらすの域を速脱するの善本あり

丹陰竹涯莊門熙先生編

白紙摺明朝綴帙入寸珍本全五冊

定價金壹圓

墨客草園

抑も墨場を携帶して臨摹を充る書多と雖も草字と集めて雅態を求索に適するもの少し夫れ書は古人の筆法を據らざれば一點一畫筆を下りて婉雅を乏せ況んや草字に於てとや編者此を見るあり是を以て歴世十朝漢晉宋梁陳唐宋元明清の古法帖中最も純粹なる者に就き片冠の引法より編纂し六卷でなし墨場必携の用を供す乃ち古人を一堂に聚め手執り心お談及るの快とあさしむる書おして例之を學とさるも幸に愛玩し玉は、家雞野鷲の俗體を脱し老顛狂僧の風神に入るも抑もた遠しとせず是に於てや謹て江湖の草韻家に告ぐ

移石原田先生摹古及加筆

半紙本全二冊

定價金五拾五錢

國畫芥子園畫譜

方今文苑畫圖の書冊皆か机上の簡便と鏡ひ江湖に刊行するもの多しと雖獨り國畫の書に至ては未だ完全無闕なるもの蓋し多りらざるあり今斯畫圖の如き古今我邦畫工の巨擘三十餘名家の揮毫をるものを蒐輯しん物草木走獸飛禽百花魚介の六譜に分ち口管に唐刻芥子園畫譜の林裁を效ふ之に憑て學

べは初學の士筆と下して其礙滯をきに至らん假令之を學ぶる君子も幸に愛玩たまふも戀愛心を轉じ爽快の情に移らしむる珍書あり

越谷吾山先生輯 半紙本全五冊 定價金七拾五錢

諸國物類稱呼 右越谷吾山先生 我日本國中經歷の際其土地の風俗人情より一郡一邑の訛詞迄委しく記載去々天文地理人事服食草木花果菜蔬飛禽器賦獸魚鱗介昆蟲及言語の諸門を分編して問々名家の諸國訛詞入りの唱歌狂歌連俳狂句等を挿みし古人未曾有の珍書あり

大藏永常先生著述 半紙本全三冊 定價金五拾五錢

農具便利論 此書の耕業に益ある諸器械と集録し其便利と評論して近來流行のポンプの製作までも載せ記したれの農業の諸君に欠くべからざる寶書あり

天狗房花鷹大人編輯 寸珍美本全一冊 定價金拾五錢

佳花 戲作者の巨擘馬琴京傳春水三馬等の諸先生と始め三十餘名家の最も面白き文章を輯めし小冊子と傲し

餘薰 狂歌題林抄 小本全四冊 定價金六拾五錢

四季 狂歌堂四方真顔大人撰 狂歌房酒月米人大人撰 小本全四冊 定價金六拾五錢

戀雜 狂歌題林抄 小本全四冊 定價金六拾五錢

江湖諸大家の狂歌を東都名高き狂歌房主人が撰りれ其上へ題毎に枕詞及び珍詞と大寄に掲載せられ

去煩る滑稽がまたる古今未曾有の珍書中の珍書され世の風流粹客達是非一部に御進め申せても御求

めあらんことを乞ふ 契沖阿闍梨家集 中本全四冊 定價金七拾五錢

漫吟集類題 契沖阿闍梨の歌詠の大家なるよて世道に遊ぶ人のよく知るところなり此書之契沖阿闍梨の家集にして

四季戀雜并に富士百首長歌等各々類選にし一代之よみ歌を洩さざり五千餘首をあつめし大秘書也 富草屋大人校正 袖中大和詞大成 寸珍本全一冊 定價金拾壹錢

無益の詞を去り當時用ゆることは多く増補して附録は歌の讀方を出し歌學初心の便利の小冊子とす 建綾足大人著 早川廣海大人補 小本全三冊 定價四拾五錢

增補歌文要語 古事記日本記延喜式和名抄萬葉集伊勢うつは源氏おちくば竹取そのほか和書物語等の詞を部類に分ち

て註解と加へ出所をのけし信切な書されは和歌連俳と云ふも更あり和文綴るとも便とある珍書あり 芭蕉七書 小本全二冊 定價金三拾八錢

此書の行脚定〇二十五ヶ條〇十六篇〇句合〇嵯峨日記〇奥の細道〇發句集等此の七部の蕉翁秘書を合

刊去て同じ道に遊ぶ人の便とす 小本全四冊 定價金六拾五錢

芭蕉附合評註 翁一世の附合集夢太の撰らみよかきと委しく註解去て好者の爲に其意をさすややすくそ

俳諧季寄たね袋 懐中本全一冊 定價金拾八錢五厘

凡る俳諧初心の手引となる書数多ありと雖有來にて便少し此季寄本は四季詞草木鳥獸及び月の異名年

中行事等都て註を加へ俳諧式法發句仕様附句の用捨其外極秘傳故實と出せし初心必携の書あり 思之中村貞纂述 博愛與田頼閣正

頭書 小學作文教授書 小本全五冊 定價金壹圓廿五錢

〇初等科(一ノ卷二ノ卷)一ノ卷卷首に俗文要語活用問答、令正誤文、俗文復譯法等と掲げ次に日用單

簡文百余章と編む〇二ノ卷卷首に俗語若干と掲げ次に四季贈答文、祝賀、悔吊文、電信文、公用文諸証文

等數百章と載す 中等科(三ノ卷)(四ノ卷)(五ノ卷)三ノ卷卷首に作文要字和解と掲げ次に雅文に俗語と挿む僅に三十

内外と以て一文成す〇四五ノ卷紀、記事、論、説、題、拔、傳、序、祝文、吊文、祭文等數百編を載す 南泉中村貞著述

開化農商往來

半紙本全一冊

定價廿二錢五厘

此書は農商家の心得日用器具の名目等と掲げ尋常の農商往來と異なり専ら暗誦に便ならんため五七の句調を綴り且習字にも用ひらるべき筆耕と撰みたれり世に兒童一本提携て其裨益と賞之玉はんとを西敬著書

畫圖入門

橫綴本全十冊

一冊ニ付定價金拾錢

西先生は畫學に妙と得らざりと諸君の熟知する處かり今茲に贅言せず此書は中小學校に教則に其さ編述せる書にして直線法○曲線法○野畫○紋畫○器用物○家屋○花草○果物○禽獸○人物○等と顯し順序宜きと得彫刻鮮明あると以て教科用ニ適當なる書と云ふべきを請ふ世に慢然散布れる畫學の諸書と同一視するをかく卷を繕て無瑕完璧なる良書なるを知り玉ふべし

西敬纂譯

近刻

同按影畫法

近刻

入門幾何畫法

近刻

同三部圖式

近刻

此書は用器畫則ち幾何畫法投影法透視法等と詳述せる書おえて教科用適當あると勿論用器畫と畫字中必要の科にして各府縣教則目は此科あるも未だ發兌此書を見せ依て教則の順序に隨ひ此書を出版す故に只教科用のみならず工藝家も必讀の書也

鷹野房吉著述

中本全二冊

定價廿五錢

新選作文必用

手紙を認めるに解り易き爲同意味の記かへと澤山あるし萬物の類語文章のイロハ引を載せ日用文と若干掲げる重寶の書也

鷹野房吉著述

新選女用文章

中本全一冊

定價拾七錢

此書は婦人郵便はがきの認め易き短文を年始狀を始め種々の雜用に至る迄都く余章を掲げ頭に一々其文の類語と載せ容易に作文を得べき懷中便益の小冊子也

製水處

前川源七郎

本處橋通北久寶寺

山町百十八番地

